HCニューズレター

No.13

Human Care News Letter

2012年3月 日本ヒューマン・ケア心理学会

ヒューマン・ケアと感情～輪・和・笑～

第13回大会報告

大阪市立大学大学院看護学研究科　石井 京子

このたびの東日本大震災に遭われた方々へまずは心よりのお見舞いを申しあげます。

平成23年7月23(土)・24(日)日に、大阪市立大学において日本ヒューマン・ケア心理学会第13回大会を開催いたしました。当日は、前日まで迷走していた台風も方向を変えて進んでくれ、比較的過ごしやすい風のある中での開催でした。多くの参加者の出席をいただき、無事に終了できたことを感謝いたします。

大会は参加者106名、研修会参加者54名と盛会でした。発表も、口頭発表15演題、ポスター発表41演題と多くの申し込みをいただきました。今回は口頭発表をロングセッションとショートセッションの2つ設けましたが、予想を超えたロングセッションへの申し込み数をいただき、熱意あふれる質疑応答の姿勢を嬉しく思いました。

学会賞の第1回授賞式と受賞者講演、大会主催校発案の大会発表賞(口頭発表・ポスター発表)も授与させていただきました。研修会も2つ企画しましたが、いずれも多数の参加者がありました。研修会Iでは「問題解決療法：喪失・不安を体験するがん患者や被災地への支援」として、平井啓先生(大阪大学)に、がんという病気からくる喪失や、どこでも突然起こりうる災害によりもたらされる甚大な被害と喪失からの立ち直りを、ワークを交えた学習で体験させていただきました。研修会IIでは、芹澤隆子先生(日本ダイバージョナルセラピー協会)による「楽しさをあきらめない～ダイバージョナルセラピー～」で、参加者を引き付ける熱意あふれるご講演をいただきました。大会講演では山田冨美雄先生(大阪人間科学大学)に「災害からの復興を支援するヒューマン・ケア～輪・和・笑のこころで～」という急遽、一部題目を変更した時節に沿った講演をいただきました。その中で、被災当事者からのお話：災害後の日々のありよう、今日まで過ごしてこられた中での人との交わりなどを、ご本人の言葉で語っていただきました。まさに本大会のテーマの真髄であり、参加者の心に深く感銘を残してくださいました。シンポジウムでも人の生死にかかわる急性期看護から、被災、高齢者介護、そして病気になるという経験の場においてもヒューマン・ケア～輪・和・笑～の大切さが語られ、会場の参加者一同、感銘を受けました。

懇親会では、若い研究者がお名前しか知らなかった憧れの先生と熱心に話をしているさまが随所で見受けられ、ヒューマン・ケア心理学会の今後の発展を印象づけてくれました。最後になりましたが、様々な不手際があったことと存じますが、皆様の温かいご支援をいただき、無事に大会を終了できましたことを心より感謝いたします。



主催校そばの通天閣

日本ヒューマン・ケア心理学会第5期役員（'11年7月～'14年総会）

※常任理事

会長　小玉 正博（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

理事　足立 久子（岐阜大学大学院医学系研究科）(学術)
安保 英勇（東北大学大学院教育学研究科）(広報)
※石井 京子（大阪市立大学大学院看護学研究科）(編集)
石川 利江（桜美林大学大学院国際学研究科）(学術)
井部 俊子（聖路加看護大学大学院看護学研究科）(研修)
※岩崎 祥一（東北大学大学院情報科学研究科）(学術web)
※遠藤 公久（日本赤十字看護大学看護学部）(編集)
※長田 久雄（桜美林大学大学院老年学研究科）(研修)
小山田隆明（岐阜女子大学文化創造学部）(学術)
岸 太一（東邦大学医学部）(学術・編集)
※木村登紀子（いちかわ野の花心理臨床研究所）(学術)
後藤 宗里（椙山女学園大学看護学部）(学術)
志賀 令明（福島県立医科大学看護学部）(研修)
※清水 裕子（香川大学大学院医学系研究科）(事務局長)
菅 佐和子（京都大学大学院医学研究科）(編集)
※廣瀬 清人（聖路加看護大学看護学部）(広報)
三田村啓子（修学院ことばと子どもの相談室）(研修)
山崎登志子（広島国際大学大学院看護学研究科）(編集)

監事　島井 哲志（日本赤十字豊田看護大学大学院看護学研究科）
藤澤 伸介（跡見学園女子大学文学部）

以上、アイウエオ順

顧問　岡堂 哲雄（聖徳大学大学院臨床心理学研究科）

大会講演

「災害からの復興を支援するヒューマン・ケア ～輪・和・笑のこころで～」

大阪人間科学大学　山田 冨美雄

第13回大会の大会講演は、大阪人間科学大学の山田冨美雄先生による「災害からの復興を支援するヒューマン・ケア～輪・和・笑のこころで～」でした。大会の3か月前に発生し日本中を震撼させた東日本大震災に焦点を合わせた、時節にあったご講演でした。

さらに1995年の阪神淡路大震災の復興事例、2005年のJR福知山線列車事故による被害者ご自身による、事故後のご家族のありようとそこから立ち上がっていかれたお話は、涙なしではお聴きできないものでした。ここでは、まさに人の繋がりこそが立ち上がる力となったことが紹介されました。仲間の癒しに力づけられると同時に、学生時代から親しまれた落語の笑をばねに、生活を取り戻していかれたお話から、医療や介護・家族・学校など、様々な集団で生じている人間関係の軋轢の解決における人と人の輪と和、さらに、生きる力としての笑の存在が示されたと感じました。

災害は年齢・職業・健康状態などを問わず襲ってきますが、特に子どもたちに多大な影響をもたらします。甚大な被害に遭った小学校で3か月後にストレスチェックリストを使った授業を行い、耐え難いストレスを受けた子どもたちに復興の兆しがみられているという嬉しい結果も紹介いただき、末永い支援の取り組みの大切さが示されました。

このように、ご講演の中でつらい出来事からの立ち直りを支える人の輪と和、明るくユーモアがある笑が苦悩を乗り越える力となることが語られ、それこそがヒューマン・ケアの心だと感じました。懇親交流会場においても、参加者から大きな感動を得たことが語られ、話題に花が咲いたことを申し伝えたいと思います。

（大会委員長　石井京子）

第13回シンポジウム

「ヒューマン・ケアと感情～輪・和・笑～：臨床の場で活用が期待されるヒューマン・ケア」



大会講演 山田 冨美雄先生

大会2日目の7月24日、プログラムの最後にシンポジウムが開催されました。ヒューマン・ケアは様々な場で実践されますが、急性期医療、被災地、高齢者介護の場での実践について、そして視点を変えて患者の立場からそれぞれのシンポジストに発表をいただきました。いずれの発表も実践・実経験であるが故に、心揺さぶられ、涙が浮かぶほどでした。

急性期重症患者に対するケアを実践している北村先生（りんくう総合医療センター）からは、時に生死の決定にまで関わるなかで、チームワークが大切であることを学び、また患者・家族と感情を共有し共にいることは希望を紡ぐものであると気づかされました。患者自身のことばや遺族、家族の言葉に、人間の豊かな感情による癒しの力を感じました。

被災地では、災害ケアの理論・学説が実情に合わず、また諸説が異なった方法論を展開していることが木村先生から報告されました。そして、実践をとおして生きることの意味を突き詰められながら、被災者の生を振り返る手助けをすることが重要であると報告されました。そばに寄り添い続けることが“共苦”とも感じられる中、継続的にやれることをやり続けることが大切であると実感しました。

高齢者介護を実践している芹澤先生（日本ダイバージョナルセラピー協会）からは、認知症によって表情、言葉、行動の自由を失ってしまった人々に対して行われるダイバージョナルセラピーの実践が報告されました。午前中の研修に引き続いた報告は、高齢者の変化が映像によって語られ、感銘をうけるものでした。豪州と日本の文化の違いに触れながら、ユーモアや愛情表現が直接的である豪州という社会で生まれたダイバージョナルセラピーが、人間存在の根源に働きかけていると感じました。

患者の立場として植村先生が報告された闘病生活は、孤立しがちな患者の気持ちにいかに気づくか、医療従事者の感性、姿勢を問われたように感じました。日記として綴られた記録は、時に自分自身を支え、感情を吐露する道具ともなっていました。辛い気持ちを綴ることで、整理されたようです。病によって家族の大切さを実感されることが示されていました。友人や家族とともに医療従事者が相互補完的に支えていける実践が大切なのだと感じました。

コメンテーターの島井先生と小玉先生からは、対象のニーズや特徴に応じて解決策がある中、共通することがらは何であるのか問いかけられました。人間の持つ感情が動くとき、それが自分や相手の変化や対処の始まりであることに気づくことが専門職として重要であり、どのような場においてもケアの担い手と受け手には、感情の動きがあることが共通であること、生きている表現であり、人としての存在そのものにアプローチしていく入口として感情があるとの回答でした。

喜怒哀楽といわれる感情ですが、ケアの提供者として感情が動くことが辛く、避けてしまいそうになる場でも、輪・和・笑の力で取り組んでいきたいと強く感じさせられました。

（大会事務局長　近森栄子）

研修会Ⅰ・Ⅱ学会参加者の感想

「Ⅰ.問題解決療法：喪失・不安を体験するがん患者や被災地への支援」

今回、2つの研修会が開催され、私は初日の午後のプログラムに参加した。研修会のテーマは「問題解決療法を用いた慢性疾患患者の心理」であった。特徴としては、ワークショップが取り入れられていたので、実際に参加者同士で意見交換を行うことができた。また、平井啓先生が実例を交えて講義をして下さったため、より能動的で実践的な内容で、理解が深まったように思う。

問題解決療法は、カウンセリングの一種（認知行動療法）で、5つのステップ（①心配ごとを明らかにする　②現実的な目標を設

定する ③具体的な解決策を決める ④実行できそうな解決策を選ぶ ⑤解決策を実行してみる）から成り立っている。そこでは、患者とカウンセラーの会話を通して、患者の認知や行動が変化していくことが期待される。私は精神科で看護師として働いており、入院日に患者から抱えている問題の詳細を聞き、患者と共に目標設定を行い、その解決を目指して、日々、支援を行っているが、その過程が問題解決療法に類似しているように思われた。また、平井先生は、がん患者のサポートグループを主催されているとのことで、発病に伴い心理的、身体的に問題が生じることを指摘されていた。その指摘から、私は、病気が患者の心理に深く影響を及ぼしていることを再認識した。これは、患者の看護上の問題を査定するに際し大切な観点であるため、今後の看護実践に反映できるように今回の研修会での学びを生かしていきたいと思った。

（東京武蔵野病院　岸本雅子）

「Ⅱ.楽しさをあきらめない：ダイバージョナルセラピー」

研修会は7月23日に2時間半にわたって行われた。日本における現代の高齢化社会のあり方を示唆するものとなった。研修会では、ダイバージョナルセラピー発祥の地オーストラリアで学んでこられた芹澤隆子先生より、日豪での高齢者ケアの社会的背景の相違点やダイバージョナルセラピーの理論や実際を具体的に教えていただくことが出来た。ダイバージョナルセラピーとは、「朝、目が覚めた時、ベッドから起きる理由を持てるように手助けすること」であり「老いることは楽しむこと。耐えることではない」と言う事が、本来の高齢者の生き方であることを知る機会にもなった。また、オーストラリアの寿命は日本と変わりないにも関わらず、最期を迎えるにあたり日本では高カロリー輸液や胃瘻で生命維持をしているが、オーストラリアではほとんどこういう医療処置をせず、いわば自然死という形で最期を迎える方が多いとの事であった。病院や施設に居ても尚、「その人らしさ」を失うことなく、最後まで「人生を楽しんで過ごす」事が大切であるという事を教えられたと思う。今後、増加傾向にある高齢化社会にある日本でもダイバージョナルセラピーは、推奨されて来るのではないかと思う。現在、病院勤務である自身もとても興味のある研修会となった。

（関西医科大学附属滝井病院　加藤由香）

第1回　日本ヒューマン・ケア心理学会論文賞

受賞者を代表して

桐蔭横浜大学工学部　片山 富美代

このたび、第1回学会論文賞を賜り大変光栄に思っております。査読および審査をしていただきました先生、共著者の長田久雄先生、小玉正博先生に心より感謝いたします。また、調査に協力いただきました患者のみなさまにもお礼を申し上げます。

本研究は、病気認知という日本ではまだ研究されていない概念を用いて、血液透析を受けられている方々の病気認知を明らかにし、病気とうまく付き合いながら生活していただく援助を考えることを目的に始められました。受賞した論文はその研究の一角をなすものです。個人にとっての病気はその人が体験している自分の病いであり、病気認知は自分自身の病気に対する見方やとらえ方です。受賞論文ではそれを量的に捉え、患者として、生活者としての病気適応にどのように影響しているかを明らかにしました。

病気認知は、Leventhalがself-regulating processing system（自己調節モデル）の中で用いた概念です。この概念に基づいて開発されたIPQ-R（The Revised Illness Perception Questionnaire）をもとに日本語版認知質問紙を作成しました。原尺度との違いは、病気や治療に対する比較的長期的な範囲における感情的評価である「感情表象」にポジティブな感情を捉えようとしたことです。その結果、病気に対するネガティブな感情が生活者としての適応であるQOLに対してマイナスに影響しており、治療に対するポジティブな感情が患者としての病気適応に対してプラスに影響していることがわかりました。援助者が患者の病気の体験や査定を理解しようとする姿勢と、病気の脅威を語るだけでなくポジティブな感情への働きかけをすることが患者の自律的セルフケアを促すことにつながるのではないかと思われました。本研究は、まだ始まったばかりで実際の援助場面での有効性や疾患による特異性などが明らかにされていませんが、今後、医療場面における病気認知という視点からの援助方法の検討がなされることを望んでおります。



第1回学会論文賞の講評

昨年度、受賞対象者の年齢層をより広げるために「研究奨励賞」から「学会論文賞」と改称して、初めての選考になる。3年に1度、その間の優れた研究業績に対して本賞が贈呈される。今回の受賞対象論文は、Vol.9からVol.11No1までに掲載された論文である。①単独または連名の場合には筆頭の候補者であること ②その時点でその方が3年以上の会員であること ③原著論文であることの基準をクリアーしている7篇が候補となった。そのなかで、栄えある第1回学会論文賞として、片山富美代氏の「血液透析患者の病気認知が病気適応に及ぼす影響」（Vol.11No1）が選出された。

本論文は、5か所の施設で外来血液透析を行っている患者（最終的に212名）を対象に質問紙調査法を用いて、Leventhalの自己調節モデルの理論的枠組みから、病気認知、病気適応（QOLを含める）の関係を明らかにした。その結果、病気認知構造で「病気の結果」次元が「陰性感情表象」とは正の、「陽性感情表象」と負の相関関係にあった。「急性時間軸」「病気自己統制」「治療統制」は「陽性感情表象」とそれぞれ正の相関関係にあった。このように血液透析者患者の病気認知構造は（陰性・陽性）感情表象とそれ以外の病気認知が2層構造を示していた。また、陰性感情表象はQOLや病気適応感とは負の、そして陽性感情表象は病気適応と正の関連があった。患者の解釈による感情評価によってQOLや病気適応に影響を及ぼす可能性が示唆された。病気適応には治療に対する肯定的な感情をもてるように医療的な働きかけることの重要性が再認識された。

候補論文に共同研究者として審査者（理事）がいる場合には、その方たちを除いて審査を実施した。その結果、①論文の展開の論理 ②研究推進の技術 ③学会の貢献度 ④総合評価の全てにおいて、本論文が最も相応しいと判断された。審査者のコメントには、腎透析という厳しい疾患をもつ患者を対象にしたという点で貴重な研究である、感情表象を介したモデルが目新しい、分析手続きが丁寧であるなど、高い評価がなされた。

（審査委員長　遠藤　公久）

日本ヒューマン・ケア心理学会 第14回大会のお知らせ
〈ケアする人のケアを考える〉

日程…　2012年7月15日(日)・16日(月)

会場…　筑波大学東京キャンパス文京校舎

メインテーマ…「ケアする人のケアを考える」

大会講演　柳田　邦夫(ノンフィクション作家、評論家)
「ケアと生命と意味の発見」

シンポジウム
「ケアの相補性―人が支援し、支援される構造―」

研修会　講師　堀越　勝(国立精神・神経医療研究センター
認知行動療法センター　研修指導部長)
「認知行動療法　実践の最先端」

今後のスケジュール

1. 演題申し込み(払い込み)　締切　4月28日(土)
2. 抄録原稿提出　締切　5月19日(土)
3. 参加申し込み　締切　5月31日(木)

事務連絡先：
〒東京都文京区大塚3-29-1　東京キャンパス
筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達科学専攻　小玉研究室気付
「日本ヒューマン・ケア心理学会」学術集会第14回大会事務局
電話・FAX　03-3942-6852
大会専用アドレス　hc14@human.tsukuba.ac.jp
大会HP　http://jhc2012tsukuba.jimdo.com/

※原則として連絡は専用メールアドレスにお願いいたします。
メールを使用できる環境にない場合のみ、FAXをお使いください。

第14回 大会準備委員会委員長：小玉正博(筑波大学)
副委員長：伊藤まゆみ(共立女子短期大学)

「ヒューマン・ケア研究」投稿論文募集

学会誌は年2回発行しています。論文の投稿は随時受け付けておりますので、積極的な投稿を期待しています。詳細は学会誌編集事務局にお問い合わせください。

(編集担当　遠藤公久)

Web担当からのお知らせ

現在、会員向けに限定したサービスとして「ヒューマン・ケア研究」に掲載されている原著論文(2000-2011 No.1)がWebからダウンドールできるようになっております。ご利用下の際には以下のIDとパスワードを入力する必要があります。なお、パスワードは、会員以外にはお知らせにならないで下さい。

ID　:HCkaiin2012
パスワード:QYFNAUJM

なお、このID及びパスワードは、2012年4月1日より有効となります。それまでは前年度のID及びパスワードをお使い下さい。

(Web担当　岩崎祥一)

お知らせ

新年度よりニューズレターの発行に加えて、メールによる広報を新たに始めます。内容は著作紹介、研究会や実践活動の報告などを予定しています。また、学会からのお知らせなども含まれる予定です。当面、発行は随時になります。手始めに、この広報手段による配信を希望する方は、氏名と所属を明記のうえ、member@j-hc.jpあてにメールをお送りください。

(広報担当　安保英勇)

編集後記

昨年度は役員改選がありました。このため、扱いは小さくなりましたが、昨年度の開催された学術集会の記事に、主催校の近くの通天閣の写真を掲載してみました。常任理事会の機能を理事会で執り行うことになったので、これまでとは異なった方針の写真を掲載することができました。委員会活動の手前味噌ですが、感心しました。(広報担当　廣瀬清人)

●学会へのお問い合わせ等(学会事務局)・「ヒューマン・ケア研究」(学会誌編集事務局)への論文投稿は、それぞれ次のとおりです。

●学会事務局
〒761-0793　香川県木田郡三木町池戸1750-1　香川大学医学部看護学科
清水研究室気付　日本ヒューマン・ケア心理学会事務局
humanpsy@med.kagawa-u.ac.jp
TEL&FAX／087-891-2240

●学会誌編集事務局
〒150-0012　東京都渋谷区広尾4-1-13　日本赤十字看護大学　遠藤研究室
気付　日本ヒューマン・ケア心理学会編集事務局
humancarepsy@redcross.ac.jp
TEL&FAX／03-3409-0914